巡礼・遍路の思想

桂島　宣弘

本年度の日本思想史学会大会シンポジウムは、「巡礼・遍路の思想」を主題とします。巡礼・遍路は、周知のように平安時代末期以降に広がった聖地・霊場への参詣行動であり、現代にまで影響を残している、宗教的にも重要な行事といえます。これまでは、主として宗教史、社会経済史、民俗学の分野などで研究されてきたテーマといえますが、その背景に観音信仰・地蔵信仰・山岳信仰や空海・聖徳太子などの聖人とされた人びとに対する信仰・思想などが存在していることを考えるならば、思想史分野においても重要なテーマであることは明らかです。以下、簡単に趣旨説明を行っていきたいと思います。

佐藤弘夫会長の研究などを参照しますと、巡礼・遍路は、平安時代以降に始まったものですが、当初は聖地・霊場とされた山に修行僧が向かう、いわば専門的宗教者による「閉じられた」宗教行為であったといえます。一二世紀以降になると、それが民間にも徐々に広がっていきますが、この過程には紛れもなく顕密仏教、本地垂迹信仰の民間社会での受容の様相が刻印されています。すなわち、平安末以降に人びとは本地仏の浄土への往生を願い、往生の手段として巡礼を行うようになります。この点に関わって、本日第一報告をお願いした舩田淳一氏（東北大学）は、西国巡礼縁起を詳細に検討して、その淵源は平安末の『法華験記』などにある

ことを明らかにしています。すなわち、『法華験記』の「巡礼」「観音経」「冥土・蘇生譚」「滅罪信仰」などが数多くの巡礼を伴った伝承を生み出し、それが人びとの巡礼を誘ったというわけです。本日のご報告では、こうした事例を踏まえ、さらに「運心巡礼」というこれまであまり注目されてこなかった中世巡礼の思想史的分析が行われることになっています。舩田氏は、往生信仰・「冥土・蘇生譚」などが曼荼羅世界と結びつく以上、実際には巡礼が行われない観想としての巡礼が中世には存在し、そこにむしろ中世的巡礼の重要な特質が現れているとしています。きわめて興味深いご報告となるものと思われます。

近世には交通路の整備とも相まって、さまざまな巡礼・遍路、参詣が民間に広がるに至り、それらとの関連での研究が新城常三氏らによって精力的に進められてきました。これらの研究を通じて、各地に札所が作られ、『名所図絵』『巡礼図絵』「御詠歌」も盛んに出版されるようになったことが示され、四国八十八カ所、西国三十三観音への巡礼、金比羅参り、伊勢参りなどの具体的様相も明らかにされてきました。近年では、旅や名所・旧跡の普及との関連での研究も行われていますが、この点に関わっては第二報告として青柳周一氏（滋賀大学）にご報告をお願いしました。青柳氏は近江国唐崎社を事例に、そこが名所化していく背景には寺社がさまざまな巡検使を迎え、その都度施設や宝物を見せる義務を負っていたことが関係していたことを指摘しています。また、これに伴って寺社周辺の清浄化の維持も義務化したとしています。一見、自然発生的に形成されたかに見える近世の名所・旧跡の成立には、こうした政策的所為が存在していたことは、近世の寺檀体制下での巡礼のありようを再考する上では貴重な指摘と考えます。近世の巡礼・遍路の盛行は、一方ではこうした政策と不可分のものであったことは、看過できない点であると思います。

第三報告をお願いした井上智勝氏（埼玉大学）のご報告は、近世日本に現れた新しい巡礼を通して、そこに存在しているイデオロギー的問題を看過してはならないとする斬新なものです。すなわち、井上氏は近世に新たに現れた巡礼として、式社参拝、皇陵巡拝などを挙げ、それらが律令制の式内社や皇陵を比定しようとする、きわめてイデオロギー的なものであったと指摘しています。それらは、当初は神職・国学者が担っていたものでしたが、幕藩領主側の宗教政策とも絡み合い、さらにやがて在地社会でも受容されることで、復古的イデオ

ロギーの普及とも関わる、いわば幕末期にかけての天皇にまつわる思想的問題群を構成していくという指摘です。以上の二報告は、これまでの近世の巡礼研究があまり取り上げてこなかった分野を提示するもので、新鮮なものだと考えています。

最後に今次大会では、残念ながら近現代の巡礼・遍路の問題には触れることができませんでしたが、いうまでもなく、そこにはナショナリズムとの結びつきや、空海像の変容など近現代日本の思想史的問題も映し出されていると考えられます。森正人氏の研究などを参照して多少言及しておきますならば、近代の巡礼・遍路は、メディアや知識人も介在しつつ、ますます観光化・商品化の度を強めていきます。また、戦時中には国家が戦意高揚に用い、戦後は地域行政機関が道路開発のために利用したりするなど、政治的性格も色濃くなっていきます。この他、空海の聖地などもむしろ近代の「創造」にかかるものが多かったことが指摘されています。こうした側面はいずれも興味深い問題群ではありますが、同時に近現代の人びとは霊場への巡礼に「貧病争」からの「解放」を真剣に願い、最近でも「癒し」「自分探し」を託し続けていることも事実です。以上からすると、いうまでもなく、近現代の巡礼・遍路も、時代相の中での思想や信仰の姿を鮮やかに示し続けているわけであり、これらの問題についてのさらなる研究が待たれるところだと考えます。

最後に、思想史研究の動向に関していえば、近年、その研究の幅が広がり、思想家のテクスト分析のみならず、人びとの実践や行動に対する思想史的分析も行われるようになりました。このように、思想と実践を一体的に捉え、あるいは思想を民間社会との関わりで捉えていく上で、巡礼・遍路は最適のテーマの一つであるといえます。なお、日本思想史学会としては初めて四国の愛媛大学で大会を開催することになったに鑑みても、このテーマは相応しいとわたくしたちは考えています。

以上、簡単ではありますが、大会シンポジウムの趣旨説明とさせていただきます。

（立命館大学教授）